

文芸

俳句

訪ね行く佐倉途中に冬佐倉

池田 逸子

一枚の日数の早き十二月

伊藤 敬子

辛と甘ブランド葱や友の味

今関満喜子

日向ぼこ陣取り合戦夫と猫

魚地 照子

寂けさや心耳に霜の声響く

川島 通則

空と海和して輝く初日の出

向後 寛

森羅万象なべて天地の初日影

越川せつ子

なれそめのロマンを語る冬夫婦

小松 藤男

惜秋や煙一筋村遙か

佐瀬 輝夫

神妙にペンを下せる初日記

椎名万里子

土間に置く冬至南瓜や碗の中

市東富美江

つれ添ふて共に老いゆく今朝の春

鈴木とし子

首痛くなるまで仰ぐ初御空

鈴木 利子

去年今年つなく願いは穏やかに
土屋美枝子

家計簿の最初に記すお年玉

冬の日を背中にかけて畑仕事

早川 勇

軽やかなリズム小春の鉄音

藤田 雅夫

短歌

コーヒーを好む息子に飲ませたし
ブラジル産のそを買ひてきぬ

田崎 尚美

芹なづな歌ひながらにとんとんと

我が家流儀の七草をする

水須 俊

見慣れたる田畑車窓に広がりぬ

冬枯れなるに閑なりけり

八角 三枝

枯れ枝に多につきたる雨粒は

空の光をこもこも反す

椎名美枝子

寒き日に花の鉢をば運び入れ

車庫の窓べの日だまりに置く

加瀬 弘子

百五歳の高野のおばがくたざりし

指輪は今日も吾をはげます

斉藤つね子

.....

お互いに逢える望みも薄らいで

賀状でつなく古き友情

伊藤 定男

原油安我が家の家計うるおして

老いの二人に冬のボーナス

越川 義則

元旦の何はともあれ無事祝う

初日めでたし今年の計は

高梨 キヨ

機内より見ゆる雲海ことごとく

黄金の色に光りていたり

浅野 榮子

作品展

◎町民会館ミニギャラリー

- 2月 木目込みクラブ
- 3月 光書道会

◎文化会館ロビー展

- 2月 生け花クラブ
- 3月 陶芸クラブ

◎サビア展

- 2月 短歌会
- 3月 水墨画クラブ

◎銚子商工信用組合展

- 2月 アート押し花クラブ
- 3月 絵手紙ひかりの詩

こうほう博物館 83

黒焦げの梅の種

2月には、坂田の梅の花もほころび始め、わが町では梅まつりが催される。梅といえば、早春を彩る花として日本全国に植樹されている。原産地は中国といわれ、日本にいつごろ渡来したか定かたではないが、奈良時代には各地に植樹され、平安時代には一般的な樹木となり、菅原道真が詠んだ詩にも梅が登場している。梅は花が愛でられるだけでなく、初夏に捻る実は、梅干しや梅酒等で食用にされ、黒焼の実は薬として古来より珍重され、今日では、まことに有用な樹木となっている。

さて、今回紹介するのは、篠本神山谷遺跡奈良時代の住居跡から出土した黒焦げの梅の種で、奈良から平安時代の遺跡からは、このような炭化した梅の種が出る

ことが多い。炭化した実が出土するのは、当時は梅の実を梅干しなどの食用ではなく、黒焼にして薬用としていたためであろうといわれている。この地でも梅を栽培していたかはわからな

いが、このような形で梅が普及していたことは確かだ。左の写真は、その証拠の一品である。

(社会文化課 道澤 明)



▲炭化した梅の種